

ニキビ戦線

角井 まる

もうずっと、ニキビが治らない。おでこ頬は皮膚科の薬で治まったのに、顎だけが駄目なのだ。

最初に出来たのはゴマ粒くらいの3〜4個だった。しかし、次の日には全てくっついて、スイカの種の大きさになってしまった。急いで化粧水を変えたり、薬を飲んだりしたのだが、ニキビは消えることなく発生と融合を繰り返し、今は1円玉大の腫れと痛みが顎先に埋まっている。

(もう耐えられない！)

私は頭を掻きむしり、半狂乱で怪しげなパッケージに手を伸ばした。先日手に入れた塗り薬だ。

『ついに十万本突破！』

『痛いけど、よく効きます。』

スマホの画面下に現れた長方形の枠の中では、派手な彩色の文字列がピカピカと踊り、その横で陶器のように滑らかな肌の女性が微笑んでいる。

健康な時ならば鼻で笑って一蹴するのだろうが、先の見えない肌荒れ生活に疲弊していた私は藁にも縋るつもりでポチっていた。怖くてしばらく放置していたが、いざ手に取ると期待の混じった感情があふれる。

広告の“痛い”という文字が気になったが、背に腹は代えられない。思い切ってチューブから小さなイモムシ程の分量を取り出し、ぶっくりと膨らんだ大きなニキビに全て乗せて、円を描きながら塗り込んでゆく。途端に顎が疼きだした。

「戦だ！戦だ！」

サワサワと無数の声が聞こえてくる。同時に患部が太鼓のように内から外から打ち据えられ、その痛いことといったら。

(びっしょり！)

拭き取るうにも、もう遅い。薬はあつという間に染み込んで、赤く腫れ上がった皮膚はドンドンというリズムに合わせてたゆたう。やがて、荒れ狂う海のように大きく揺れ、一際太鼓の音が力強くなると、耳の奥で一つの大きな声が響き渡った。

「戦えー！」

何故だろう。その一言で、未知の薬への不安が遠のき、闘志がメラメラと湧き上がってくる。みなぎる気持ちに呼応して身体にもグンッと力が入る。

この忌々しいニキビに沢山の誰かが飛び込んでいる。私も行かなくちゃならないんだ。立ち上がり、頭の後ろで両腕をピンと伸ばして、手を重ね合わせる。プールの飛び込みのような体勢で次の言葉を待てば、やがて、「来いー！」と誰かが叫んだ。

本能で私が呼ばれたとわかった。反射で反応した足が空高く跳躍し、目の前の地面に向かって身体がくの字に折り曲がる。木地のフーリングはそこにはない。あるのは大きな火山である。赤黒く恐ろしげなその山は、真ん中の窪みから呼吸をするように熱波を放出している。

(ええい、ままよー)

眼前に迫った灼熱地獄の大穴に私は臆せず飛び込んだ。

重力に身を任せ、瞬く間に地底に行き着くと、そこは燃える荒野であった。

「グズグズするな、構え！」

息つく間もなく、怒号が飛ぶ。見ればトロロを全身に被ったみたいにとろりとした白い人型が幾つも蠢き、中でも大きい一つが声を張り上げていた。皆、その言葉に素早く従い、顔もないのと同じ方向に意識を向けている。

「見ろ！」

彼の指す地平線の彼方から、隊列が蜃気楼のように揺らめきながら向かってくるのが見えた。

「あれは……！」

端の個体は、いつも嫌味ばかり言ってくる先輩だ。その隣は汗臭くてたまらない課長。今朝方、列を抜かしてきたスーパーのおばちゃんもいる。

共通しているのは、火の灯ったライターやマッチを携え、不敵な笑みを浮かべていることだ。一つ一つは小さな火元だが、あれだけの数があれば気温は瞬く間に上昇していき、環境が更に悪化していくの言うまでも無い。ああやって私の肌をいたぶってきたのだ。

(おのれ、許すまじ……)

前方を睨みつけ、味方の体から溶け出したであろう足元の白いドロドロを力強く丸めて団子を作り出す。今すぐにも攻撃を始めたいが、これは戦。一人では到底勝てない。だからこそ、戦略が命なのである。彼らをギリギリまで引き付ければ、全身から汗が噴き出す。

「かかれ！」

熱さが限界に達したその時、号令がかかった。待ってましたとばかりに一斉に奴らに団子を投げつけると、それらは強い光を放ち、轟音立てて敵を粉々に打ち砕いた。周りを見れば沢山の人型が夢中で玉を投じている。皆腕が良い。投げた先には必ず標的が居て、気持ちが良い程にどんだん爆散してゆく。この戦況ならば、きつとすぐにも制勝し、平穏な日々が訪れるだろう。

しかし、現実には甘くなかった。突如大きな塊が空から降ってきて、我々の前に立ちはだかっただのだ。

(お局さんだ……)

パツパツのスーツに身を包んだ巨体が悠然と地上を見下ろしている。私は思わず後ずさった。やつは毎日他人の仕事の粗を探しては、大声で説教をするのが趣味なのだ。うっかり

狙われてしまったら最後、次の日は誰でもニキビが一つ増える。まさに肌の悪魔なのである。彼女が高笑いをしながら首をゆっくり左右にふると、口から放たれた火炎放射で辺り一面が焼き払われた。

あまりの光景に、皆が攻撃の手を止めて、呆然としている。味方の大きな人型は急な熱さのせいか、縮んでしまったようだ。指示する者もなく、不安げなざわめきが広がり、良い空気が立ち込める。

誰かが何とかしなくてはならない。その誰かとは誰だ。そもそもこの大地は誰のものだ。こんなに好き勝手にされて、苦しんでいるのは？

私は目をゆっくりと瞑り、深く息をすると、ありったけの声で叫んだ。

「戦えー！」

(私がやらなくちゃ。この場所を守るんだ。)

息が続く限り声を上げ、同時に団子の投擲を試みる。しかし、もはや大地には地表が透ける程に薄い膜が張っているばかりだ。ここからだというのに、材料がつきかけている。武器がなくては勝てないのに。涙をこらえようと必死に奥歯を強く噛みしめていると、横の人型が私の肩を叩いた。

「これを使え！」

あろうことか自身の身体の一部を塗り取ったのだ。

「そんなことしたら痛いでしょうー？」

慌てて戻そうとすると、彼は両の手で粘液の乗った私の手の平を包み込み、ぐっと握りしめた。

「君がとどめを刺すのだ。必ずやれる。」

その力強い口調で、先の大きい人型だと気がついた。もはや私の腰の位置ほどの背丈であったが、未だ全身から闘魂がみなぎっている。

私以外にも諦めていない人がいる。その安心感に目尻に溜まっていた涙が一筋こぼれ落ちた。

「はい！」

彼に腫はないけれど、勝利への意志と思念が結びつき、私達は見つめ合った。一秒も満たない時間の中で、戦いの高揚と信頼を共有したのだ。

彼はスルリと手を離すと、馬のごとく素早く華麗な脚さばきで駆け抜け、敵の巨軀に体当たりを決めた。刹那、かつて無い轟音が鳴り響き、辺りには濃い煙が充満する。

モヤが晴れると彼の姿はなく、独りお局がしゃがみ込んで、爆ぜたつま先を押さえながら苦しげに唸っていた。代償は大きい、凄まじい攻撃力だ。

これを皮切りに皆が関の声をあげ、大敵に向かって飛び込み始めた。辺りでは花火のような爆音が絶えず鳴り響く。もう煙だらけで何も見えない。ただ、みるみる味方の気配が減ってゆく。

私は掌に乗った団子を地べたの僅かな材に何度も塗りつけ、少しずつ大きくしてい

った。感傷に浸っている暇はない。私にはこれしかないのだ。確実に決めなければ。

間もなく大敵が白目を剥いて、伐採された大樹のようにゆっくりと仰向けに倒れ始めた。

(いまだー)

広い背中が地面と接地した瞬間に手の甲から飛び乗って、腕を伝って肩まで駆け上がる。不規則に振動する体表に何とかしがみつきながら、鎖骨を滑りおり、喉元をよじ登り、ついに眼前へと行き着いた。

呼吸を整え、きっと彼女を見据える。もはや味方も敵も私達だけだった。

「無駄だ。今ここで倒されても、私はすぐに復活する。」

この期に及んでも、お局が口角を引きつらせながら無理矢理笑うものだから、私も負けじと、笑顔を向ける。

「何度だって、打ち倒す。ここは私のものだから。」

深くシワの寄った眉間に照準を合わせ、大きく振りかぶる。左足をめいっぱい広げて踏ん張ると、全身の筋肉がぎゅっと締めまり、玉を握る指先にも力がこもった。

(有難う優秀な戦士たち。戦いはこれで終わりだ。)

皆に負けないくらいの雄叫びを上げながら、高校球児顔負けの美しいフォームで腕を振り下ろす。ギョルギョルと音を立てながら飛んでいった最後の団子は、弾丸のような力強さと素早さで見事ど真ん中を撃ち抜いた。

同時に眩い閃光が辺りを包み、爆風が吹き荒れる。急いで大きな鼻の穴に身を隠し、やり過ぎすと、そのうち全ての音が止んで静寂が辺りを包みこんだ。全身の力が抜け、ザラリとした頬面に大の字で倒れ込む。

(…やったんだ。)

じわじわと湧き上がる実感に胸が熱くなる。お局が死に際に残した不吉な台詞に不安を覚えつつも、今はまだ激しい戦いの終息に喜びを感じていたい。

空を見上げると、無数の穴が外界の光を拾って瞬いている。あんなにも大きい火山も、ここから見れば星の欠片でしかないのだ。

天の川も顔負けの美しい輝きに、思わず両手を伸ばすと、東の空でプツリと音がして光芒が差し込んだ。最後の仕上げだ。

(大事なところよ、優しくしてね。)

想いを通じたのか、お局の亡骸は穏やかに上昇してゆく。ここに居れば丁度いい。キラキラと降り注ぐ光の粒子を浴びながら、私は寝転んだまま心地よい揺れに身を任せ、二元の世界へと帰るのだった。